

題目：帯結びの補助具の発生と進化 ―「帯留」から帯締・帯揚・帯枕へ―

高須 奈都子

本論文は、着物を着装する際に帯結びの補助具として使用する、帯締、帯揚、帯枕の発生と定着について、その過程と時期を明らかにするものである。

第1章では、研究の目的と、先行研究を交えながら江戸時代後期に発生した帯締と帯揚の元であるとする「帯留」について述べた。

第2章では、かつて「帯を留める」という機能を持っていた「帯留」が、いつ頃、どのような過程を経て今日の純然たる装飾品である帯留に変遷したのかを明らかにした。

帯留の出处は「帯留」の中の「金具付き帯留」であるが、明治以降に流行した「帯留」の変化を探るため、まずは産業財産権のうち、特許、実用新案、そして意匠登録の出願記録を調査した。その結果、帯留の様式は、①江戸時代後期に発生した留金具を嵌め合わせて留める「パチン式」は明治末には廃れ、②代わりに台頭した留金具を引っ掛けて留める「掛け留め式」は大正末には廃れ、③今日の標準的な様式である「紐通し式」に移行していたことが判った。またそれに伴い、「帯留」という言葉は、留金具と紐を合わせたものから、装飾部のみを指すものへと変化していった。この「掛け留め式」から「紐通し式」への移行が、「帯留」の留金具から装飾品への転換であると結論付けた。

また、産業財産権の調査に加え、実作品調査、文献調査を行った結果、留める機能を喪失し装飾品となった帯留は、多種多様な材料を取り込み、流行意匠を反映し、様々なサイズのものをつくるなどして多様化が進んでいたことも判った。

第3章では、帯締の「帯留」からの分化について考察した。

発生時から組紐の「帯留」は見られたが、明治20年代後半頃に組紐店が「帯締」という名称でこれを販売するようになっていたことが、雑誌広告の調査から判った。

国語辞典の調査では、大正時代に入るとこの「おびじめ」という言葉が掲載されるものの、昭和30年代までは多くの辞典で「帯留の金具がつかぬもの」という説明がされており、帯締が「帯留」から発生した痕跡をそこに見ることができた。

一方で、雑誌記事の調査では、昭和に入ると帯締の単独特集記事などが組まれるようになり、「帯留」とは完全に別のものとして扱われていた。そしてその記事の内容からは、帯締も帯を締め留める機能的な紐というだけでなく、太さや色柄などが多様化し、装飾性を高めていたことが判った。

第4章では、帯揚と帯枕の発生と呼称の定着について考察した。

浮世絵の調査から、帯揚は「帯留」が持っていた、帯の結び目を高い位置で保持する役割を引き受ける形で分化したものであることを明らかにした。さらに文献調査と国語辞典の調査から、帯揚にはそれ以前に「背負揚」という名称があり、明治30年頃には当初の

機能よりも装飾品としての位置づけを確立しつつ、「帯揚」という名称の方が一般化していったことが判った。さらに実用新案の内容から、帯揚が「帯留」から引き受けた役割は、帯枕の紐の開発により、帯枕とその紐に移行しており、このことが帯揚の装飾化を可能にしていたことが判明した。また、長らく「帯揚の芯」などと呼ばれていた帯枕が、「帯枕」の名前で認識されるようになるのは昭和30年頃であったことも判った。

第5章では、帯締、帯揚、帯枕が何故必要になったのかを、浮世絵調査から考察した。

その結果、帯締も帯揚も太鼓系の帯結びでの使用が最も多く、明治半ばにはお太鼓結びに両方を使用する傾向が見られた。そのことから、帯締、帯揚、帯枕の使用はお太鼓結びの流行、そして標準化が大きく関係していると推察した。結び方などの考察の結果、お太鼓結びの標準化により、結んだ帯の形状保持、帯自体を結ばないことによる傷みの軽減、体への負担軽減などを理由に、帯締と帯揚・帯枕の使用が進んだと考えた。

以上のことから、帯結びの変化に連動し、帯の上部で結び目を保持していた「帯留」は帯揚へ、折り上げた垂れを押さえ止めるために使用していた「帯留」は帯締へと、機能面での役割が明確になり分化していき、さらに機能性を高め進化していくのと同時に装飾性も付加されていったことが明確になった。

最終的に、帯締は機能性と装飾性を両立する帯結びの補助具として、「金具付き帯留」は機能を失い純然たる装飾品として、帯揚はその「芯」として存在していた帯枕に帯結びの補助具としての機能を委ね、ほぼ装飾品としての役割だけを果たすものとなったと結論付けた。

また、その発生と分化の時期については各調査の結果より、①文化の頃に「帯留」が発生、②幕末～明治維新の頃に「帯留」より帯揚が発生、③明治30年代には帯揚の芯である帯枕が本来の帯揚の機能を担い、帯揚はほぼ装飾品となり、④大正末頃には紐だけの「帯留」は帯締、「金具付き帯留」は帯留へと分化していったと結論付けた。